【資　料】

高年初産婦の育児支援に関する文献学的考察

The Literature Review on Childcare Support for Older Primipara

松嶋　知子[1)]　　横山　美江[2)]
Tomoko Matsushima　　Yoshie Yokoyama

Abstract

【Objectives】The aims of this study were to review previous studies of the child care support for older primipara in Japan from two categories: “physical and psychological” and “breastfeeding”, and to get suggestions for public health nursing.

【Methods】The keyword search terms “older primipara” and “childcare” were used to search the medical literature database, Igaku Chuo Zasshi, for Japanese-language studies published between 2000 and November 2019. After sorting this yielded 32 references valid for this review.

【Results】Reports on physical and psychological aspects showed that older primipara were more likely to sleep less after childbirth and to be more tend to childcare anxiety and stress, and to increase over time. Reports on breastfeeding showed that compared to older primipara and under 34 years primipara, there was no difference with mixed feeding, although establishing breastfeeding was often more difficult for older primipara.

【Conclusion】Most previous research ground were at Hospital, and the periods were between early postpartum and 2 months later after delivery. This study indicated the importance for building relationship between older primipara and public health nurse to find health problems and their needs in early stage.

Key Words：Older primipara, First childbirth after 35 years old, Childcare

要　旨

【目的】本研究は、国内における高年初産婦への支援に関する研究を「身体・心理面」「母乳育児」の２つの観点から概観し、地域母子保健における高年初産婦の育児支援への示唆を得ることを目的とした。

【方法】医学中央雑誌刊行会から「高年初産」and「育児」をキーワードに、2000年以降2019年11月まで検索を行い、32件を採用した。

【結果】身体面・心理面に関する報告では、高年初産婦は産後の睡眠時間が短く、育児不安やストレスが経時的に増強しやすいことが報告されていた。母乳については、34歳以下の初産婦に比べ、母乳栄養の確立は困難である場合が多いが、母乳育児では差がないことが報告されていた。

【結論】今回概観した文献は、産後早期～２か月頃、および病院でデータを収集した研究がほとんどであった。産後の不調へ早期支援が望まれる。

キーワード：高年初産、高年初産婦、育児

[1)] 大阪市立大学大学院看護学研究科前期博士課程
[2)] 大阪市立大学大学院看護学研究科教授
＊連絡先：松嶋知子　〒545-0051　大阪市阿倍野区旭町１丁目５－17　大阪市立大学院看護学研究科

Ⅰ．緒言

我が国では初婚年齢の上昇に伴い、女性の第１子出産平均年齢も年々上昇しており、2016年の第１子出産時年齢は平均30.7歳であった。また、2005年の29.1歳から10年間で1.6歳上昇しており（厚生労働省，2017）、今後も出産年齢の上昇および高年初産婦が増加することが予想される。

高齢妊娠は、合併症等のリスクが高いことが指摘されている（日本産科婦人科学会，2017）。森（2014）が開発したガイドラインでは、標準的な看護ケアに高年初産婦の特徴を踏まえたケアの提供を推奨している。同ガイドラインにおいて、高年初産婦には高年経産婦や若い世代の初産婦とは異なるニーズがあることを指摘しており、高年初産婦における産後の身体的心理社会的健康状態の経過等に関する研究の乏しさにも言及している。

地域母子保健分野においては、高年初産婦に対しては、妊娠中から出産後の身体・社会的リスク評価で支援不要と判断されるまで要支援対象として関わる場合が多いものの、地域においていかに高年初産婦に対して育児支援を実施するかということに関しての報告はほとんどない。

高年初産婦に特徴的な医学的要因として、「帝王切開」や「うつ病歴」等を特定した報告（山本ら，2015）があり、高年初産婦にとって、「産後の身体の回復」、あるいは「精神の安定」が重要であることが伺える。本研究では、現在までに報告された高年初産婦の育児に関する研究を「身体･心理面」ならびに「母乳育児」の２つの観点から概観し、地域母子保健における高年初産婦の育児支援への示唆を得ることを目的とした。

Ⅱ．方法

引用文献の検索には、医学中央雑誌刊行会の医中誌パーソナルWebを用い、2000年以降2019年11月までの収載誌から“高年初産”“育児”をキーワードとして検索を行った。その結果48件が該当し、そのうち経産婦を対象とした文献、年齢等の情報がなく高年初産と判別しにくい報告､総説等を除外し32件を採用した。2000年以前の文献は２件該当したが、出産年齢の上昇が加速する以前の報告であるため、対象年に含めなかった。今回は高年初産婦への支援を検討する上で、採用した各文献の焦点が身体・心理面に関する論述か、母乳育児に関する論述かによって２つに類型化し、考察を行った。文献により35歳以上の初産を“高齢初産”と表現しているものもあるが、同義であるため原文表現のまま記載している。

Ⅲ．結果および考察

１．身体的観点から

高年初産婦の身体面に焦点を当てた報告は２件であった（表１－１）。

但馬（2017）が、高年初産婦は34歳以下の初産婦と比較し、総就床時間および入院中・退院後の総睡眠時間とも有意に短く、退院後の睡眠効率も悪いことを明らかにした。また、遊田ら（2018）は、妊娠後骨粗鬆症を併発した高年初産婦への看護を振り返り、妊娠後骨粗鬆症のリスクを考慮した観察や保健指導が必要であることを報告している。

睡眠は、心身の疲労回復に効果があり、睡眠が量的･質的に低下することで健康や生活への支障が生じると言われている（厚生労働省，2014）。森ら（2016）も、高年初産婦に特徴的な支援ニーズとして､産後の回復･疲労蓄積予防のための睡眠時間の確保と基本的ニーズ

表１－１　高年初産婦の身体面に関する文献

報告者	発表年	論文題目	研究対象	デザイン	人数	結論
但馬	2017	高年初産婦の産後３日目から２週間健診までの睡眠状況と疲労感の実態　35歳未満の初産婦との比較	35歳以上初産群、34歳以下初産群	準実験量的	n=42	高年初産群の方が総就床時間、入院中及び退院後の総睡眠時間ともに有意に短く、退院後の睡眠効率も悪かった。
遊田ら	2018	妊娠後骨粗鬆症を併発した高年初産婦に対する看護	妊娠後骨粗鬆症を併発した高年初産婦	質的	n= 1	妊婦の背景を正しくアセスメントし、妊娠後骨粗鬆症のハイリスク事例との認識も持ち、異常の早期発見・予防に努めるとともに、個別性に合わせた関わりを家族とともに考え、退院後につながる看護を提供することが重要。

の充足等を挙げており、“睡眠”は重要な評価項目であると言える。

妊娠後骨粗鬆症は、知識がなければ、腰痛等の訴えから、すぐさま妊娠後骨粗鬆症を予測することは難しく、支援者が専門家として知識を得ておく必要があり、その困難さをより詳細に把握することで早期受診・治療につなげることもできよう。また、必要に応じて高年初産婦にもそれらの情報を伝えることも重要であろう。

２．心理的観点から

心理面に焦点を当てた報告は23件であった（表１－２、１－３）。心理面に関する報告は「不安･ストレス」と「サポート」の２つに分類した。

１）不安・ストレスについて

高年初産婦の「不安・ストレス」について検討しているものは17件であった（表１－２）。そのうち、産後早期は４件、産後１か月間または１か月時点のものは８件、産後２か月までが１件、産後４か月時点が１件、生後４か月～１歳７か月児を持つ母親を対象としたものが１件、産後３か月・１年・２年時点と経年的に調査したものが１件、生後２か月～１歳半の乳幼児の母親を対象としたものが１件であった。

妊娠や新しい家族が増えることはストレスを伴うライフイベント（Holmes, 1967）とも考えられており、初産婦が不安やストレスを抱くことはごく自然なことと言える。出産後５日間の初産婦の唾液中アミラーゼ値およびEPDS得点等を測定した調査（藤岡ら，2014）では、出産後３・５日目に唾液中アミラーゼ値およびEPDS得点が高年初産婦で有意に高値であり、高年初産婦にのみに経時的上昇があったことを明らかにしている。同調査では、高年初産婦が有意に育児困難感を示す得点が増すこと、およびストレス内容の詳細を記述したデータ数が高年初産婦のみ経時的に増加すること等も報告している。退院時の調査では、「退院後の児の世話」や「退院後の自分自身の生活」を不安要因として挙げている報告もある（岩田ら，2015）。また、岩田ら（2017）は、うつ傾向のある高年初産婦には、「新しい生活への適応」についても留意する必要があるとしている。一方、國井ら（2014）の質的研究では､「人生経験の豊富さがもたらすメリット」や「母親としての新しい自分に対する自己肯定」等を指摘しており、高年初産婦は育児を経験した自分自身をポジティブに捉えていることもわかる。育児に対して希望や自信、あるいは不安やストレスをアンビバレントに感じていることを理解し、必要なサポートを検討していくことが重要である。

産後１日から１か月までの高年初産婦のストレスを自由記述で分析した調査では、出産直後と１か月時点では、育児量の増加に伴い、不安や否定的感情の出現が増加していることを報告している（藤岡ら，2017）。産後１か月頃は、新生児を自宅に迎え数週間が経ち、産婦や夫が自己の役割や日常生活の再調整に取り組んでいる時期、あるいは里帰り等から自宅に戻り、これから家族としての役割や生活を調整しようと模索する時期でもある。そのような変化が影響するものと推察される。鈴木ら（2017）の調査では、産後１か月時点の「夫の心身の不調」を表す総得点が高年初産群で有意に高かったことを報告している。更に、高年初産群では児の育てにくさに関連する得点が産後５日目より産後１か月時点で上昇していたのに対し、非高年初産群では低下していたことを明らかにしている。この時期に、高年初産婦は育児や日常生活における身体的負担を認識している場合が多く、夫や家族からの評価や必要とするサポートが得られないことにより育児の困難さが増すことが指摘されている（岩田ら，2016；畠山ら，2015）。精神的サポートや育児や家事の実質的なサポート等が、高年初産婦の母親役割の自信と関連しているという報告（前原ら，2016；2015）もあり、この時期のサポートが高年初産婦にとって重要であることが示されている。一方、高年初産婦の心理として「キャリアに裏付けられた精神的･社会的強み」や「更なる自分自身の成長」等が見られる（新村ら，2012）との報告は、産後早期を調査した國井ら（2014）の報告とも共通しており、一貫して高年初産婦の強みであると言える。

産後２か月の初産婦に調査した前原ら（2015）の研究では、高年初産群が34歳以下群と比べ、より育児ストレスを感じていることを指摘している。公募型乳幼児健診に参加した生後２か月～１歳半の児を持つ母親への調査（北村，2016）では、34歳以下群が高年群より育児不安を測る尺度で高い得点を示す部分もあった。尺度や対象範囲が異なるため、これらの比較は困難だが、不安やストレスが必ずしも高年初産婦に多いわけではないと言える。前述の前原ら(2015)の報告で、高年初産婦自身のストレスが「褥婦の病気」､「手段的･評価的サポートに満足していない」､「産後１か月時に疲労が強い」等の要因との関連を指摘しており、高年初産婦は20代の初産婦よりも子どもにより適切な対応ができるが、社会的孤立感とストレスが大きいとの報

表１－２　高年初産婦の心理面に関する文献

	報告者	発表年	論文題目	研究対象	デザイン	人数	結　　論
不安・ストレス	岩田ら	2015	日本人高年初産婦における早期産後うつ症状の予測	初産時年齢35歳以上の日本人女性	量的	n=479	産後うつ症状の危険性を予測する因子として、「緊急帝王切開」「出産経験満足度の低さ」「日常生活の身体的負荷の高さ」「新生児の長期合併症」「退院後の新生児の世話の心配」「退院後の自身の生活に対する心配」の６つを同定した。
	藤岡ら	2014	初産婦が産褥早期に育児困難感を抱く要因　出産後から５日間の短期縦断調査より	高齢初産婦、20～34歳の初妊婦	量的	n=89	• 高齢初産群と適応年齢群で比較すると、ストレス反応であるアミラーゼ値が産褥３日目と５日目で有意に高値であった。また、高齢初産群では経時的にアミラーゼ値が高くなった。 • 育児困難感スケールの中の「不安・困惑などの育児困難感Ｉ」では、高年初産群が有意に高得点であった。
	藤岡ら	2013	出産後４日間のストレス詳細とストレス反応の経時的変化　高年初産婦と適応年齢初産婦との比較検討	高齢初産婦群と34歳未満群	量的	n=88	• ストレス反応を示す唾液中アミラーゼ値は産褥３日目、５日間に高齢初産婦が有意に高得点を示した。 • EPDS得点も産褥３日目、４日目に高齢初産婦が有意に高得点を示し、高齢初産婦にのみ経時的変化を認めた。 • ストレス内容の詳細では、コントロール群がより多くのストレス内容を表出していたが、経時的に減少する傾向を示した一方で、高齢初産群は経時的に増加していた。
	國井ら	2014	高齢初産婦の母親となる過程－産褥早期にある褥婦に焦点をあてて－	35歳以上の初産で産後１週間以内の褥婦	質的	n= 4	• 妊娠発覚時に高齢で妊娠したことへの驚きと喜びを感じ、妊娠中には周囲の協力や夫の支えと夫婦の絆に支えられながら高齢妊娠・出産の不安とリスク受容し出産を迎えていた。 • 子どもに対しては成長と将来に対する希望を持ち、育児と就業の両立についてはジレンマも感じていた。妊娠～育児期を通して年齢ゆえの気がかりを感じているものの、母親としての新しい自分を自己肯定しながら母親となる過程をたどっていた。
	藤岡ら	2017	高齢初産婦が母親役割獲得過程に抱くストレス　テキストマイニングによる産後１か月間のストレス言動分析	35歳以上の初産婦	量的	n=35	• 受容期（産後３日まで）は児に関する単語が約半数記載され、受身的な時期でも児を気に掛けていた。 • 保持期（産後３～10日）に児に関する単語が大幅に増加し、解放期（産後10日～１か月）には大半を占めていた。 • 「不安だ」に係る名詞は母親役割獲得過程に、「心配だ」に係る名詞は些細な児の異変・異常に関連していた。「ストレスだ」に係る名詞はスムーズに進まない育児技術や子育てに関連していた。
	鈴木ら	2017	高年初産婦が抱く産後１か月までの育児不安の特徴	単胎の初産婦	量的	n=102	• 高齢初産群は非高齢群と比較し、産後１か月時点において、質問紙構成要素の１つである「夫の心身の不調」の総得点が有意に高かった。 • 産後５日目から産後１か月にかけて、「夫の心身の不調」「育児困難感」「Difficult Baby」の３成分の得点が高齢群で上昇し、非高齢群で低下していた。
	岩田ら	2016	産後１か月の日本人高齢初産婦におけるうつ症状の予測因子　リスク層別解析	35～48歳の初妊婦	量的	n=479	産後１か月時のうつ症状の予測因子として、「入院中のEPDSスコア」「経済的負担」「評価サポートの不満」「日常生活の身体的負担」「乳児の世話に対する心配」を同定した。EPDS得点の高低に関わらず、「乳児の世話に対する心配」は共通した予測因子であった。
	岩田ら	2017	産後１か月時に産後うつスクリーニング陽性である日本人高年初産婦の母親としての経験　ケーススタディ	単胎児を出産した高年初産婦	質的	n=21	高年初産婦の経験を理解するために、「身体的健康の維持」「子どもの世話：実践・気がかり・対処」「ソーシャルサポートの利用」「基本的ニーズの充足」「新しい生活への適応」の５つがテーマとして抽出された。
	前原ら	2016	産後１か月の日本人の高齢初産婦と若齢初妊婦における母親役割の自信に影響を及ぼす要因	高齢初産婦と若齢初産婦（20～34歳）	量的	n=1512	産後１か月時の母親役割の自信について、高齢群では精神的サポートとの相関と正の相関が認められた。両群とも日常生活での圧迫感、育児分担に関するパートナーとのコミュニケーション不足、乳児育児経験の欠如との間には負の相関が示された。
	前原ら	2015	出産施設を退院してから産後１か月までに母親役割の自信が高まる要因　高年初産婦と34歳以下初産婦を比較して	産後入院中に母親役割の自信得点が低かった褥婦	量的	n=745	• 退院後から産後１か月までに母親役割の自信が高まった要因は、高年初産婦では家事・育児の手段的サポートに満足していることであった。 • 両群ともに、日常生活で無理をしていること、高年群では既往歴があることは母親役割の自信と負の関連を示した。
	畠山ら	2015	40歳以上の初産婦における産後１か月間の育児に関する思い	40歳以上の初産婦	質的	n= 7	「赤ちゃんに関する心配」「自分の身体の辛さ」「サポートが得られないもどかしさ」「愛おしいわが子」「精神的なストレスの持続」「自宅に戻ってからはまたゼロからのやり直し」「 40歳という年齢からくる悩み」など10カテゴリが抽出された。

	報告者	発表年	論文題目	研究対象	デザイン	人数	結　　論
不安・ストレス	新村ら	2012	高齢初産婦の産後１か月までの育児における体験	高齢初産婦	質的	n= 4	• 高齢初産婦にはキャリアに裏付けられた精神的・社会的強みが基盤にあった。 • 妊娠、出産にあたり高齢出産に伴う身体的ハイリスクの認識を改めていた。出産後は、高齢出産を成し遂げた事への安堵感と母親自覚の芽生えがあった。 • 身近な育児を見聞きしていたイメージと実際のギャップに戸惑いつつも自分なりの育児を模索していた。
	前原ら	2015	高年初産婦の産後２か月における育児ストレスを予測する要因	高年初産婦及び34歳以下初産婦	量的	n=1412	• 高年群は、34歳以下群よりも、産後２か月時におけるPSI-SFの子どもの特徴に関するストレス得点、親自身のストレス得点ともに有意に高かった。 • 産後２か月時の親自身のストレスに関連する要因は「産後１か月時の疲労」「褥婦が産後１～２か月に病気で通院・治療したこと」「手段的及び評価的サポートに満足していないこと」「手がかかる子どもと認識していること」であった。
	園部ら	2016	出産、育児ストレス、母子関係における高齢初産の影響	35歳以上の初妊婦と20代の初妊婦	量的	n=20	• 高齢初産婦は20代初産婦と比較して、より大きな社会的孤立感とストレスを経験している。 • 高齢初産婦は親として育児に適切な対応のスコアが高い傾向にある。
	北村	2016	34歳以下初産婦と高年初産婦の児の特質と乳児の刺激敏感に影響する要因の検討	公募型乳幼児健診に参加した母親のうち、初妊婦	量的	n=1187	「児の特質」「乳児の刺激敏感」の尺度を用いた育児不安調査で、 • 高年群・34歳以下群共に、児の特質には「不妊治療」「生育環境」の２因子の影響が認められた。 • 両群共に、乳児の刺激敏感反応には、「子どもの月齢」「子どもの栄養」の２因子の影響が認められた。 • 34歳以下群が高年群より児の特質の平均値が高かった。
	森ら	2019	高年初産婦の産後４ヵ月における子育て生活体験	母子ともに重篤な異常がない35歳以上の初産婦	質的	n=21	1127コード、157サブカテゴリ―、51カテゴリー、12テーマが見出された。 テーマは、「生後４か月児との生活と自分の健康管理」「この子の成長に伴う子育て生活への適応」「この子との相互作用の楽しみと絆の形成」「この子の成長・発達に合わせた子育てと健康管理」「私なりの子育て生活への自信と母親としての至福感」「体力への限界と心配と無理しない子育て」「子育ての協動と新たな夫婦関係の形成」「家族からのサポートと関係性の深まり」「私なりの子育て方針と次子の家族計画」「出産・子育ての醍醐味と社会との新たなつながりへの希求」「子育てしている母親同士の交流」「必要性に応じた多様なサポート源の活用」であった。
	時田ら	2018	在宅で乳幼児を育てる高齢初産の母親が自分なりの子育てができるようになる長期的プロセス	A市の高年初産の母親を対象としたプログラムに参加し、在宅で育児をする母親	質的	n=22	28の概念、11のサブカテゴリ―、７のカテゴリーが生成された。カテゴリーは「思ったより大変な子育てが始まる」「里帰りから現実世界の子育てへ」「子育ての理想と現実の間でもがく」「若いママとはつき合えない」「子育てのための拠り所を得る」「とらわれから解放される」「自分なりの子育てができる」。サブカテゴリ―は《同年代のママ友を得る》《理想から抜け出すきっかけをつかむ》《子ども中心の生活調整ができる》《自分自身の心身の調整ができる》等であった。

告もある（園部ら，2016）ことから、この時期のストレスが、育児に起因するものではなく、自身の身体的問題や周囲のサポートに対する不満が要因であると推察される。産後４か月頃の生活を調査した研究（森ら，2019）では、体力への不安、あるいは出産や子育ての負担による身体的症状は続いていても、出産・子育てに価値を高く置いていることも指摘されている。時田ら（2018年）も高年初産の母親らの子育てプロセスは、理想と現実の間でもがくことから解放される時期等を経て、自分なりの子育てができるようになると分析している。多くは時間とともに適応すると言えるが、産後の健康問題への対処や精神的・手段的に頼れる存在は不可欠であることはいずれの研究も指摘している。

２）サポートについて

高年初産婦の「サポート」について検討している文献は６件であった（表１－３）。

初産婦が入院中に受けた育児支援と産後１か月までの育児不安の関連を検討した研究（森本ら，2017）では、高年初産婦は34歳以下の初産婦と比較し、ソーシャルサポートに対する認識が高いが、育児支援に不安を示す者が多くおり、公的支援を切望していることを指摘している。産後１か月間に受けたソーシャルサポートを質的に検討した研究（前原ら，2014）では、専門家のサポートを重視することが報告されている。両親の高齢化や同世代の友人の出産年齢と開きがある高年初産婦にとって、病院や地域の子育て支援機関がサ

表１－３　高年初産婦の心理面に関する文献

	報告者	発表年	論文題目	研究対象	デザイン	人数	結　　論
サポート	森本ら	2017	初産婦の入院中の育児支援認識と産後１か月までの育児不安との関連　高齢初産婦と34歳以下の初産婦の特徴	34週以降に出産した産婦	量的	n=50	• 高齢初産婦は、34歳以下の初産婦との比較で「ソーシャルサポート」のうち子育て支援センター紹介に有意に不安を示していた。 • 高年初産婦では、「退院後の授乳・乳房管理」の支援を受けたという認識は、「ソーシャルサポート」を受けたという認識と正の相関、「ソーシャルサポート」の不安と負の相関があった。
	太田ら	2016	高年初産婦の産後１か月間における夫婦間のサポート体験	高年初産婦	質的	n=10	高年初産婦は、最初に自らサポートを「求め、与える」、そしてサポートを「受ける」、受けたサポートを「価値づける」、その価値づけを夫にフィードバックするという「求め、与える」をしていた。この過程をたどることでほとんどのケースが「共に育てていく自信」を得ていた。
	畠山ら	2016	40歳以上の初産婦が産後１か月間に受けたサポートと求めるサポート	40歳以上の初産婦	質的	n=10	「負担が軽く、疲労が少ない育児方法」「年齢を考慮した母乳育児方法」「安心感が得られる専門家からの判断」「産後の育児状況を見すえた妊娠期からの支援」「高年出産した者同士の交流」「利用したいサポートシステム」の６カテゴリーが抽出された。
	前原ら	2014	高年初産の母親の産後１か月間におけるソーシャルサポートの体験	高年初産の母親	質的	n=21	「自分たちなりの育児生活への移行に向けた不安と準備」「産後の身体的負荷への助けと不満」「育児の試行錯誤の中での精神的支えと当惑」「育児の専門的・情報的支援の探求と納得」「自分たちなりの育児生活の始動における協同と自負」の５つのテーマが見いだされた。
	金井	2014	ストレングスモデルを活用した高年初産婦・家族への育児支援	40代の初産婦	質的	n= 1	• ストレングスモデルを活用し、早期からの家族を含めて育児支援介入は育児負担の軽減に有効であった。母親の育児負担軽減に有効であった。 • 産前に育児指導を行うことにより、産婦本人と家族に入院中に行う指導に更なる効果があり、自主的に児に関わることができた。 • 産婦本人と家族のQOLの向上につながった。
	小松崎ら	2014	産後ケア事業の評価利用時期別のケアニーズ	産後ケアセンター利用者	量的	n=241	利用者は約半数が35歳以上の母親であり、第１子が約８割を占め、核家族が多かった。

ポートの一員として強く認識されることは重要であると言える。小松崎ら（2014）の調査では、産後ケア事業の利用者の約半数が35歳以上、約８割が第１子であり、身体の休息と共に精神的援助も受けられる施設のニーズは今後も高まると考えられる。

太田ら（2016）は、高年初産婦と夫が「共に育てていく自信」を得るためには、自らがサポートを「求め、与える」「受ける」、受けたサポートを「価値づけ」、建設的に夫に「フィードバックする」という過程を辿ることが必要であると述べている。前述の「高年初産婦の不安・ストレス」では、産後１か月頃に生活の再調整が必要なことや適切なサポートが得られないこと等に対して不安やストレスを感じており、夫婦間のコミュニケーションに課題が生じやすいことが推察される。ストレングスモデルを利用した育児支援では、夫や家族に対する産前の指導が、産後の育児に対する自主的な関わりや産婦および家族のQOL向上につながったとあり（金井，2014）、包括的な家族支援の視点が必要だと言える。

３．母乳育児の観点から

高年初産婦の母乳育児に関連した報告は７件であった（表２）。

質的に検討した文献には、母乳育児に対する思いについて検討したもの（富田ら，2016）、初回授乳時から退院時までの思いの変化に着目し検討したもの（矢岡ら，2015）、授乳の意思に影響を与える社会規範について検討を行ったもの（濱田，2012）があった。量的に検討した文献には、年齢や初経産別に産後６か月間の母乳率を比較検討したもの（前原ら，2018）、産後１か月の母乳育児確立状況を不妊治療の有無で検討したもの（坂上ら，2014）、NICUに入院中の児の母乳育児の状況について論じたもの（倉田ら，2012）、退院時母乳率に負の影響を与える因子や支援難易度を検討したもの（中野ら，2019）があった。

母乳育児は、母子双方の愛着形成に重要な役割を果たしており、児の吸啜が母親から子どもへの愛着をより強固にすることが指摘されている（南里，2009）。高年初産婦で産後の授乳が上手くいかずにマタニティーブルーを引き起こした例（中島ら，2012）もあり、授乳は産後の母親の心理に大きく影響すると言える。

表２　高年初産婦の母乳育児に関する文献

報告者	発表年	研究対象	デザイン	人数	結論
富田ら	2016	出産後に母子同室した35歳以上の初産婦	質的	n= 4	• 「母乳育児に関する期待と不安」「母乳育児をすることの困難感」「自己効力感の高まり」「想像と実体験の乖離」「母乳育児継続に関する葛藤」「家族からの支援に対する思い」の６カテゴリーが抽出された。 • 高年初産婦は体力的困難感や母乳育児継続に葛藤を感じながらも母親なりの母乳育児を確立していこうとする特徴があった。
矢岡ら	2015	35から40歳の初産婦	質的	n= 4	• 初回授乳時には「母乳をあげたいという意思」「児の扱いに対する戸惑いとうまく吸着できないことに対する焦り」「母親になった実感」、初回授乳後～退院直前頃には「直母量が少ないことに対する焦り」「授乳を自分でやっていかないといけないという覚悟」「助産師の助言による発想の転換」等、退院時には「授乳は精神的・体力的にたいへん」「自立に向けての対処行動の気づき」「児への愛着と親としての責任感」と時期別に合計12のカテゴリーが抽出された。
濱田	2012	妊娠経過が正常な妊娠後期の初妊婦	質的	n=17	17名中７名が高年初産婦であった。母性イデオロギーや子どもの健康を守る望ましい「母親」を規定する社会規範と、反対に母乳育児の失敗や育児ストレスへの危機感に対処したり、「母親」として逸脱していると見為されないために正当化を行うことに価値を置く社会規範が示された。
前原ら	2018	non-BFH施設で出産した母子ともに異常がない褥婦	量的	n=1775	高年初産群は、経産群や34歳以下出産群と比較し、産後退院前～産後６か月の全時点で母乳栄養率が最も低かった。母乳育児率に群間差は認められなかった。
坂上ら	2014	産後入院中（退院前日）及び産後１か月の初産婦	量的	n=1304	高年群では、不妊治療の有無と希望する授乳方法には関連はなかった。
倉田ら	2012	NICUに入院した在胎37週未満かつ出生体重2500ｇ未満の児の母親	量的	n=343	「経産婦」が有意に母乳の割合を高くする因子であった。「高齢出産」は母乳の割合を低くする因子であった。
中野ら	2019	A病院において、2012－2015に出生した健常新生児（の母親）	量的	n=2152	「35歳以上」「初産」「帝王切開分娩」の３項目が、退院時母乳率に負の影響を与える独立したリスク因子であった。産婦を「35歳未満・初産」「35歳未満・経産」「35歳以上・初産」「35歳以上・経産」の４群に分け、退院時母乳率から支援難易度を算出したところ、「35歳以上・初産」群が最も高かった。

前原ら（2018）は、高年初産群は経産婦や34歳以下の初産群と比較し、母乳栄養率が産後退院前、１か月時、２か月時、４か月時、６か月時の全時点で、高年初産婦が低かったと報告している。退院時母乳率に負の影響を与える要因として「35歳以上」「初産」「帝王切開」があり、退院時の母乳栄養を支援するのに対して、最も支援難易度が高いのが「35歳以上・初産」の群であったとも述べている（中野ら，2019）。NICUに入院していた新生児の退院時栄養法に関する報告（倉田ら，2012）では、母乳栄養の割合が34歳以下では50％以上であったのに対し、35歳以上では35～38％と低い割合を示していた。高年初産婦と34歳未満初産婦の母乳栄養実施状況を比較した他の報告（山本ら，2015）では、産後４か月時の調査において高年初産婦で有意に母乳栄養が少ないことを指摘している。これらより、高年初産婦の母乳栄養の確立は、34歳以下初産婦と比較し困難である可能性が高いと言える。一方、混合栄養を含めた母乳育児に関しては、前述の前原らの報告でも、高年初産婦と34歳以下初産婦で差がないことが報告されている。坂上ら（2014）も、年齢や不妊治療の有無にかかわらず、約８割の初妊婦が母乳育児を希望していたと報告している。高年初産婦らは、母乳育児に対する希望と、疲労や乳房トラブル等の困難との間で葛藤しながら母乳育児を確立・継続する特徴がある（富田ら，2016）。矢岡ら（2015）が、困惑・葛藤を経て、授乳に対する思考や対処行動が変化することを示唆しているように、高年初産婦は母乳栄養が困難であった場合でも、母乳育児を継続する意思を持っている場合が多いと言える。高年初妊婦らが授乳を「女性にしかできない」「母親ならばできて当然」と考える価値観がある一方で、母乳育児の失敗やストレスを回避する自己防衛、母親として逸脱しているとみなされないための正当化等の価値観を持っていることもと報告されている（濱田、2012）。

これらのことより、高年初産婦にとって母乳育児を継続することは、34歳以下初産婦や経産婦と比べて困難である場合が多いものの、高年初産婦の特徴や心理的変化を考慮した支援を継続的に行うことで、母乳育児継続の実現だけでなく、育児や母親役割に対する自信を高めることに有用といえよう。

Ⅳ．今後の展望

今回、高年初産と育児をキーワードとして、文献を概観したところ、対象とした研究時期は産後早期～産後２か月頃、および病院でデータを収集した研究がほとんどであった。

高年初産婦特有の育児に対する困難さが示されたが、強みを見いだせる報告もあった。

母乳育児に対して、多くの高年初産婦が、体力の衰えや身体的困難感に直面しながらも、母乳育児を継続しようと努力していることが複数の文献より報告されていた。対象者なりの母乳育児が継続できることはその後の育児にとって重要であり、新生児訪問等で、高年初産婦の母乳育児の困難さを考慮した授乳に関する相談やアドバイスが行われることが重要である。

高年初産婦の睡眠不足や疲労の蓄積は、非常に深刻な育児への影響を及ぼす要因となり、地域母子保健でも注意して把握すべき事項と言える。産後１か月頃から育児サポートの不足や不満が大きくなる傾向もあり、乳児前期健診までに、高年初産婦が思いを率直に話せる存在を得ていることが、孤立した育児を防ぐためには必要と言える。保健師をはじめとする地域母子保健分野に携わる者が、高年初産婦の産後の心身状態をより深く理解し、些細なサインを見逃さずに適切な支援につなげることが望まれる。今後の地域母子保健における高年初産婦に対する支援の向上のためにも、さらなる研究が必要である。

引用文献

遊田由希子, 中村美沙子, 奥寺忍(2018)：妊娠後骨粗鬆症を併発した高年初産婦に対する看護, 岩手看護学会誌, 12(2), 37-45.

藤岡奈美, 亀崎明子, 河本恵理 他(2014)：出産５日間のストレス詳細とストレス反応の経時的変化　高齢初産婦と適応年齢初産婦との比較検討, 母性衛生, 55(1), 78-85.

藤岡奈美, 中村綺花, 伊藤淳実 他(2017)：高年初産婦が母親役割獲得過程に抱く育児ストレス テキストマイニングによる産後1ヵ月間のストレス言動分析, 母性衛生, 58(1), 192-201.

畠山矢住代, 藤城優子, 松井弘美(2016)：40歳以上の初妊婦における産後1ヵ月間の育児に関する思い, 母性衛生, 56(1), 137-145.

畠山矢住代, 藤城優子, 松井弘美(2016)：40歳以上の初産婦が産後１ヵ月間に受けたサポートと求めるサポート, 母性衛生, 56(4), 523-530.

濱田真由美(2012)：初妊婦の授乳への意思に影響を与える社会規範, 日本助産学会誌, 26(1), 28-39.

Holmes TH, Rahe RH (1967)：The social readjustment rating scale. J Phychosom Res, 11(2), 213-8.

Iwata Hiroko, Mori Emi, Tsuchiya Miyako et al. (2016)：Predicting early post-partum depressive symptoms among older primiparous Japanese mothers, Japan Journal of Nursing Science, 12(4), 297-308.

岩田裕子, 森恵美, 土屋雅子 他(2017)：Maternal experiences at 1month postpartum in older Japanese primiparae with a positive screen for depression: a case study, 千葉看護学会誌, 23(1), 71-79.

Iwata Hiroko, Mori Emi, Tsuchiya Miyako et al. (2016)：Predictors of depressive symptoms in older Japanese primiparas at 1 month post-partum: A risk stratified analysis, Japan Journal of Nursing Science, 13(1), 147-155.

金井智美(2014)：ストレングスモデルを活用した高年初産婦・家族への育児支援, 長野県看護研究学会論文集, 34, 64-66.

北村亜希子［難波］(2016)：34歳以下初産婦と高年初産婦の児の特質と乳児の刺激敏感に影響する要因の検討, インターナショナルNursing Care Research, 15(3), 53-61.

小松崎愛美, 斎藤泰子, 小山千秋 他(2014)：産後ケア事業の評価 利用時期別のケアニーズ, 武蔵野大学看護学部紀要, 8, 63-68.

厚生労働省政策統括官付参事官付(2017)：平成28年人口動態統計月報年計(概数)の概況, https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai16/dl/gaikyou28.pdf.

厚生労働省健康局(2014)：健康づくりのための睡眠指針2014, https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10900000-Kenkoukyoku/0000047221.pdf.

國井麻里, 礒山あけみ(2014)：高齢初産婦の母親とな

る過程 産褥早期にある褥婦に焦点をあてて, 茨城県母性衛生学会誌, 32, 8-13.
倉田浩昭, 神田岳, 佐藤和夫(2012)：当院NICUにおける母乳育児の現状と関連する母体・新生児の臨床的背景, 日本周産期・新生児医学会雑誌, 48(4), 878-884.
前原邦江, 森恵美, 坂上明子 他(2018)：年齢・初経産別にみる出産後６か月間の母乳栄養率と母乳育児率「赤ちゃんに優しい病院」ではない施設で出産した褥婦のコホートから, 母性衛生, 58(4), 575-582.
Maehara Kunie, Mori Emi, Tsuchiya Miyako et al.(2016)：Factors affecting maternal confidence among older and younger Japanese primiparae at one month post-partum, Japan Journal of Nursing, 13(4), 424-436.
前原邦江, 森恵美, 土屋雅子 他(2015)：出産施設を退院後から産後１ヵ月までに母親役割の自信が高まる要因　高年初産婦と34歳以下初産婦を比較して, 母性衛生, 56(2), 264-272.
前原邦江, 森恵美, 土屋雅子(2015)：高年初産婦の産後２か月における育児ストレスを予測する要因, 千葉大学大学院看護学研究科紀要, 37, 27-35.
前原邦江, 森恵美, 坂上明子(2014)：高年初産の母親の産後１ヵ月間におけるソーシャルサポート体験, 母性衛生, 55(2), 369-377.
森恵美(2014)：高年初産婦に特化した産後1か月までの子育て支援ガイドライン, http://www.n.chiba-u.jp/mamatasu/doc/guidelines_fix.pdf.
森恵美, 前原邦衛, 岩田裕子(2019)：高年初産婦の産後４ヵ月における子育て生活体験, 日本母性看護学会誌, 19(1), 23-30.
森本眞寿代, 南里美貴, 川崎寿磨子 他(2017)：初産婦の入院中の育児支援認識と産後１ヵ月までの育児不安との関連 高齢初産婦.
中島明美, 奥陽子(2012)：授乳が上手くいかずマタニティーブルーを引き起こした母親への母乳育児支援を振り返る, 兵庫県母性衛生学会雑誌, 21, 64-67.
中野隆, 飴谷由佳, 中島正雄 他(2019)：母乳育児における支援難易度, 周産期医学, 49(7), 1017-1021.
南里清一郎(2009)：母乳哺育と母子関係の確立, 産科と婦人科, 76(1), 40-42.
日本産科婦人科学会(2017)：日本産婦人科医会, 産婦人科診療ガイドライン－産科, http://www.jsog.or.jp/activity/pdf/gl_sanka_2017.pdf.
新村美紀, 小川久喜子(2012)：高齢初産婦の産後１ヵ月までの育児における体験, 日本ウーマンズヘルス学会誌, 11(1), 84-91.
太田愛, 森恵美, 坂上明子(2016)：高年初産婦の産後1ヵ月間における夫婦間のサポート体験, 日本母性看護学会誌, 16(1), 9-16.
坂上明子, 前川智子, 森恵美 他(2014)：初産婦における産後入院中及び産後１ヵ月の母乳育児確立状況不妊治療の有無による相違, 日本生殖看護学会誌, 11(1), 13-20.
Sonobe Mami, Usui Masami, Hiroi Kayoko et al.(2016)：Influence of older primiparity on childbirth, parenting stress, and mother-child interaction, Japan Journal of Nursing Science, 13(1), 147-155.
鈴木七奈, 梅田和歌子, 遠藤伸子 他(2017)：高齢初産婦が抱く産後１ヵ月までの育児不安の特徴, 北海道看護研究学会集録, 59-61.
但馬まり子(2017)：高年初産婦の産後３日目から２週間健診までの睡眠状況と疲労感の実態　35歳未満の初産婦との比較, 大阪医科大学雑誌, 76(3), 93-102.
時田純子, 唐田順子(2019)：在宅で乳幼児を育てる高齢初産の母親が自分なりの子育てができるようになる長期的プロセス, 母性衛生, 59(4), 818-826.
富田紗也子, 布宮ゆり恵, 石田真衣 他(2016)：「赤ちゃんにやさしい病院」認定施設における高齢初産婦の母乳育児に対する思い, 北海道母性衛生学会誌, 45, 11-13.
矢岡真紀子, 小倉央子, 竹浦和子 他(2015)：研究・調査 高齢初産婦の初回授乳時から退院時までの母乳育児に対する思いの変化, 助産雑誌, 69(3), 250-255.
山本直子, 永橋美幸, 大石和代(2015)：高年初産婦に特徴的な医学的社会学的要因－35歳未満と35歳以上の初産婦の比較-, 母性衛生, 56(2), 330-33.